

「常に過^か渡^と期」であると認識する

「永遠の今」。

故大平正芳元首相の演説集の題名です。市長になる直前の時期にこの哲学的な言葉を目にして、私はその深遠な響きに魅力を感じてきました。しかし、その意味するところは、分かるようで分からない、というのが正直なところでした。

そんな中、スウェーデンの国家戦略の一つとして「『常に過渡期』であると認識する」という考え方があることを知りました（注）。以前にこのコラムで記した「独創指向」などととも挙げられていたものです。「永遠の今」という言葉を社会的、政治的な意味合いで解釈すると、この「常に過渡期」という言葉に言い換えてもよいのではないかと直感的に思いました。

厳密な意味では、「過渡期」は「古いものから新しいものへと移り変わっていく途中の時期」（大辞林）で、転機や曲がり角などを言うとされていますので、「常に過渡期」という表現は語弊があるかもしれません。しかし、人生にしても、社会にしても、仕事にしても、どんな時も「常に過渡期」であり、これで終わりということはない、という考え方は、前向きになれて元気を与えてくれます。

自身の存在も含めて、全ての事象は時間とともに変化していて、我々は常に過去と未来の間の「永遠の今」を生きているのです。そして、政治、経済、社会の今の状況は、過去に自分たちで作ってきたルールやシステムを前提にして生み出されているものであり、「常に過渡期」であるとの認識を持てば、これを未来へ向かって思い切って改善、改良していくことこそが大事なのではないか、と思うようになりました。その点、「常に過渡期」と認識したスウェーデンの大胆な改革実行力に比べ、我が国は既得権益に配慮しすぎて、変革に消極的すぎるきらいがあります。間違っていれば後から直せばよい、というくらいの柔軟な発想も、場合によっては必要だと思います。

「今日という日は残された日々の最初の日」（チャールズ・ディードリッヒ）と認識しながら、「永遠の今」を大切にしていきたいと思います。

（注）岡澤憲英氏講演録「第36回行財政研修会東京セミナー講演シリーズ 福祉社会を考える」

（一般社団法人 地方行財政調査会）